

2017年度
非文字資料研究センター
第5回公開研究会

「絵引から見た近世の南九州」

日時：2018年3月10日（土）13:00～18:00

場所：神奈川大学横浜キャンパス3号館205号室

プログラム

開会挨拶：内田青蔵（センター長）

趣旨説明：小熊 誠（センター研究員）

報告：「絵引とは何か—戯画を絵引する」

富澤達三（センター客員研究員／松戸市立博物館学芸員）

「『薩藩勝景百図』による南九州生活絵引」

渡辺美季（センター客員研究員／東京大学准教授）

「鹿児島琉球館について」

上原兼善（センター研究協力者／岡山大学名誉教授）

「『再撰帳』掲載絵図にみる近世薩摩国加世田郷」

橋口 亘（センター研究協力者／南さつま市教育委員会主査）

コメント：小島摩文（センター研究協力者／鹿児島純心女子大学教授）

高津 孝（センター研究協力者／鹿児島大学教授）

丹羽 謙治（センター研究協力者／鹿児島大学教授）



報告

渡辺 美季

（非文字資料研究センター客員研究員／東京大学准教授）

2018年3月10日（土）、神奈川大学非文字資料研究センター（以下、センター）主催による公開研究会「絵引から見た近世の南九州」が開催された。同年2月28日に刊行された『日本近世生活絵引』南九州編の研究

成果を広く紹介するとともに、その内容を多角的に論じることで絵引研究のさらなる可能性を探ることを目的としたものである。報告4本とコメント3本・総合討論で構成された研究会には、沖縄・広島・名古屋など遠方からの参加も含め、約30名の来場者があった。



写真1 『日本近世生活絵引』南九州編

研究会の司会は研究代表者である小熊誠氏（センター研究員）が務め、まず小熊氏から開催趣旨の説明があった。その概要は以下の通りである。

—絵引とは、図像を題材として、そこに描かれた事物・事象を知るという世界的に類例のない編纂方法を通じて、当時の人々の生活を歴史学的かつ民俗学的に把握しようとする研究手法の一つである。センターでは、日本常民文化研究所が財団法人であった時代に編纂した『絵巻物による日本常民生活絵引』の研究を発展的に継承すべく、『日本近世生活絵引』の編纂を継続的に実施してきた。まずセンターの前身である21世紀COEプログラムにおいて作成された3編（東海道・北海道・北陸）の成果とノウハウを活かして、2011-13年度に奄美・沖



写真2 会場の様子



写真3 司会 小熊誠氏

繩編を編纂した。この奄美・沖縄編を活用する形で、2015-16年度に共同研究班（計8名）にて編んだのが南九州編である。題材として取り上げたのは、1815（文化12）年に島津重豪の命により薩摩（鹿児島）藩が編纂し、その解説書『薩藩勝景百図考』とともに将軍徳川家斉に献上した地誌『薩藩勝景百図』（以下、百図）である。現存する百図は将軍に献上されたものの副本と見られ、現在、東京大学史料編纂所にて国宝・島津家文書の一部として所蔵されている。これまで詳細に検討されたことがなく、藩が編纂した地誌の内、唯一の彩色画であることなどから、絵引として編纂する意義は大きいと判断した。全102景の内、人々の生活文化が比較的多く描かれている29景を選出し、絵引編纂を通じて分析・考察を行った結果、様々な興味深い事実や検討すべき論点が浮かび上がってきた。公開研究会ではそれらを詳しく披露し、「絵引から見た近世の南九州世界」について理解と議論を深めたい。

報告

続いて共同研究のメンバー4名が研究成果に基づく報告を行った。その概要は以下の通りである。

報告1・富澤達三（センター客員研究員／松戸市立博物館学芸員）「絵引とは何か——戯画を絵引する——」



写真4 富澤達三氏

は、故・濹澤敬三氏が発案した「絵引研究」の特徴と意義を紹介し、「絵引」を「図像から客観的な情報を抽出して解析し、分析的に記述するための手法」と位置付けた。その上で、

1849（嘉永2）年に歌川国芳が描いた「流行神」の錦絵を「絵引」的手法で読み解き、国芳が、難解な謎解きの時事的風刺画である「判じもの」ではなく、時事問題を文字と戯画で容易に読み解け、また検閲も通り易い「戯画もの」と呼び得る手法を編み出して、連続作品により「事件を販売する」ことを実現したと指摘した。

報告2・渡辺美季「『薩藩勝景百図』による南九州生活絵引」は、『日本近世生活絵引』南九州編の作成経緯を概説した後、琉球館・琉球船や朝鮮人集落といった百図における異国性（異国的要素）と薩摩藩の自意識との関連を検討し、薩摩藩が自らの国際性の価値を理解し対外的に強調していたことを指摘した。



写真5 渡辺美季（筆者）

さらにこうした異国性と自意識が藩内に広がり、生活文化の一部ともなっていたことを、近世期に藩外から薩摩を訪れた人々の紀行文を分析することによって示した。

報告3・上原兼善（センター研究協力者／岡山大学名誉教授）「鹿児島琉球館について」は、百図の中核をなす鹿児島城下の図（第1-2景）において、ひときわ異質な情景を形作る琉球の出先機関「琉球仮屋」（1784年より「琉球館」）の変遷を分析し、琉球人を異国人として明確に位置付けようとする薩摩藩の政治的意図を明らかにした。またその背景として、「琉球仮屋」が琉球—薩摩の人的交流および琉球物産の流通の拠点としての性格を強めたことにより、琉球に対する支配秩序が揺らぐ懸念があったことが指摘された。



写真6 上原兼善氏



報告4・橋口亘（センター研究協力者／南さつま市教育委員会〔坊津歴史資料センター輝津館〕主査）「『再撰



写真7 橋口亘氏

帳』掲載絵図にみる近世薩摩国加世田郷」は、藩の地誌編纂事業と密接に関わって作成された加世田郷の『再撰帳』（19世紀中葉成立）から、人々の生活がうかがわれる場面を紹介し、藩が編纂した地誌か

らはうかがい知ることのできない地元ならではの詳細な情報が盛り込まれていることを指摘した。また報告テーマとは別立てながら、百図に描かれている坊津（南さつま市）の奇岩「双剣石」についての新たな発見も紹介された。この岩は江戸の浮世絵師歌川広重の「六十余州名所図会」シリーズにおいて「薩摩 坊ノ浦 双剣石」（1856年改印）として描かれているが、橋口氏は江戸の講談師伊東陵舎の『鹿児島ぶり』（『鹿児島風流』）掲載の挿絵が、その重要な種本の一つであったことを諸絵図の分析から明らかにした。

コメント

続いて3名の研究者（内1名が班メンバー）によるコメントがなされた。

まずコメント1では、小島摩文氏（センター研究協力者／鹿児島純心女子大学教授）が民俗学の視点から、



写真8 小島摩文氏

澁澤敬三氏がなぜ「絵引研究」の発案・実施に至ったのかについて、時代状況や澁澤の生育環境を踏まえつつ、①読本に比べて挿絵を重視する江戸時代の考証随筆、②ピクチャー・ディクシ

ョナリーという、二つの可能性を披露した。

コメント2では、高津孝氏（鹿児島大学法文学部教授）が文学の視点から、百図における情報選択が、「名勝を詠んだ詩歌の収集」という観点からも行われていることを指摘し、そこに「文学化」というバイアスが強く働いていたことを指摘した。

コメント3の丹羽謙治氏（鹿児島大学法文学部教授）も同じ

く文学の視点から、百図に描かれた景色に、得能通昭（1729～89年、藩士）・増田直治（1753～1806年、町人）といった薩摩の文人による同時代記録を相補い裏付ける要素が含まれていることを指摘した。



写真9 高津孝氏



写真10 丹羽謙治氏

総合討論と今後の展望

総合討論は、引き続き小熊氏による司会のもと、来場者からの質問に基づいて進められた。質問は「鹿児島琉球館を外国人居留地と捉えた上で、こうした外国との接点を持つ場所を描く画像としての意味は何か」・「百図に海から描く構図が極めて少ないのはなぜか」といった百図の絵図化の意味・意図を問うものから、琉球館にお



写真11 総合討論の様子

る日本人と琉球人との交流や貿易の実態を問うもの、また絵引上の各要素をインターネットで結び付けデータベース化することの実現可否を問うものなど多岐にわたった。また歴史学・民俗学のメンバーで構成された奄美・沖縄編と比較すると、南九州編では公開研究会のみではあるものの文学の視点が新たに加えられた点を重視・評価する声もあった。

文学の視点の重要性は我々メンバーも痛感するところで、すでに2017年度より3年間の計画で開始した、南九州編に後続する共同研究「日本近世生活絵引一行列から見る都市生活空間―」には、南九州編のメンバー8名に加え、上記のコメンテーター高津氏（中国文学）・丹羽氏（国文学）も新たにメンバーとして加わっていた

だいている。この共同研究では、1850年の薩摩藩主の参勤交代および琉球使節の行列の様子と江戸の街並みなどを、江戸勤番中の宇和島藩士が描いた「琉球人行粧之図」・「琉球人往来筋賑之図」（鹿児島大学附属図書館所蔵）を素材に絵引編纂を行い、近世日本人の生活の一部であった「行列および行列を迎える都市空間の様相」の分析・考察を目指すものである。今回の公開研究会で得られた多様な知見・論点を活かしつつ、歴史学・民俗学に、新たに文学の視点と手法も加え、当時の人々の生活に迫っていきたい。

なお未筆ながら、南九州編の作成にご協力いただいた全ての方々、ならびに公開研究会へご参加くださった方々へ、ここに記して衷心より御礼申し上げたい。

『日本近世生活絵引』南九州編 正誤表

頁	誤	正
19（左段上から7行目）	秋派遣の船	夏派遣の船
21（左段上から12行目）	魚賣の呼聲には	魚賣の呼聲は
21（左段上から13行目）	市町のほとりに	市井のほとりに
30（右段上から4行目）	春先楫船（秋）	春先楫船（二月頃）
58（図版左下）	（第60景）「蔵王巖」	（第60景）「蔵王嶽」
94（図版左下）	（第89景）「霧島西巖」	（第89景）「霧島西嶽」
125（図④）	薩摩下人女之図	薩摩古へ女之図
153（右段下から2行目）	下町の「山崎屋」	下町の「山崎店」
154（左段上から1行目）	琉球物・現金売り・山崎店	琉球物・現金賣・山崎店
154（注⑤）	新田宮など6点の挿絵	新田宮など多数の挿絵
159（左段の小見出し3から4行目）	1662年（寛文2）	1663年（寛文3）
162（参考文献、上から5番目）	『沖縄関係学論集』4	『沖縄関係学研究会論集』4
163（右段の小見出し2から2行目）	島津斎の菩提寺	島津忠良（日新斎）の菩提寺
176（下から9行目）	『沖縄関係学論集』4	『沖縄関係学研究会論集』4

（2018年5月31日）